

ポプラポケット文庫

ISBN978-4-591-13068-1

C8293 ¥620E

定価:本体620円 税別

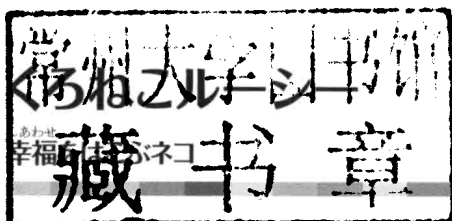
1928293006204

681

— S
B N
G62
B20
JSW
* 9 7 8 4 5 9 1 1 3 0 6 8 1 *



ポプラ社



作 いたう縁凜 / AMG出版工房

絵 曲 小唄

作・いとう縁凜（いとう ゆかり）

1989年生まれ。山羊座。千葉県在住。小さいものともふっとしたものが好き。ラブは世界を救うと信じている。アミューズメントメディア総合学院ノベルス学科卒業。この作品がデビュー作となる。

作・AMG出版工房

アミューズメントメディア総合学院で産学共同実践教育の理念を担う学内出版事業部。出版社や企業と共同で小説・シナリオ・マンガ・イラストなどの制作をおこない、これまでに数多くの在校生・卒業生を出版業界に輩出している。

絵・曲小唄（わだ こうた）

1993年生まれ。かわいいものと美しい日本語が大好き。趣味は面白いこと全般。アミューズメントメディア総合学院マンガ学科在籍。この作品がデビュー作となる。

2012年 9月 第1刷

ポプラポケット文庫082-1

くろねこルーシー ^{しあわせ} 幸福をはこぶネコ

作 いとう縁凜／AMG出版工房

絵 曲小唄

発行者 坂井宏先

編集 門田奈穂子

発行所 株式会社ポプラ社

東京都新宿区大京町22-1・〒160-8565

振替 00140-3-149271

電話（編集）03-3357-2216 （営業）03-3357-2212

（お客様相談室）0120-666-553

FAX（ご注文）03-3359-2359

ホームページ <http://www.poplar.co.jp>

印刷 中央精版印刷株式会社

製本 大和製本株式会社

Designed by 濱田悦裕 カバー写真 関 由香

©いとう縁凜 AMG出版工房 曲小唄 2012年 Printed in Japan
ISBN978-4-591-13068-1 N.D.C.913 182p 18cm

落丁本・乱丁本は送料小社負担でお取り替えいたします。
ご面倒でも小社お客様相談室宛にご連絡下さい。
受付時間は月～金曜日、9:00～17:00（ただし祝祭日は除く）

読者の皆さまからのお便りをお待ちしております。
いただいたお便りは、編集局から著者へお渡しいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用であっても著作権法上認められておりません。

もくじ

プロローグ 占うらないて、なにがいいの？ 4

第一話 はじまりは一匹びきの黒ネコ 14

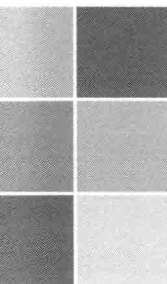
第二話 はちみつ色の琥珀こはく 37

第三話 琥珀こはくはどこにいるの？ 70

第四話 「くろねこ占うらない」に行こう 120

エピローグ 幸福しあわせをはこぶネコ 169





くろねこルーシー

しあわせ
幸福をはこぶネコ

作 itou 縁凜 / AMG出版工房

絵 曲 小唄

ポプラ ポケット文庫

此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongb.com

もくじ

プロローグ 占^{うらな}いて、なにがいいの？ 4

第一話 はじまりは一匹^{びき}の黒ネコ 14

第二話 はちみつ色の琥珀^{こはく} 37

第三話 琥珀^{こはく}はどこにいるの？ 70

第四話 「くろねこ占^{うらな}い」に行こう 120

エピローグ 幸福^{しあわせ}をはこぶネコ 169





ブローグ 占うらないて、なにがいいの？

放課後の教室。

わたしのクラス、五年一組では、毎日同じグループの女子が教室のまん中に集まる。

「このまえ成功せいこうしたおまじない、みんなに教えてあげる！」

「え、どんなの？」

「教えてー！」

また今日きょうもはじまったみたい。

恋こいにきくおまじないっていうけど、毎まい日にちちがうおまじないをややってて、ほんとうに効果こうかがあるのかな。

朝、昼休み、放課後。

クラスの子たちは、時間があれば、毎日同じ話題でもりあがる。



「こうやって、さくらんぼの絵をかい、左に自分の名前をフルネームで書くの。それで右に好きな人の名前を同じように書いて、ずっと持ち歩くの」

ずっとって、毎日ちがうおまじないをやっているのに。

いつから持っているんだろう。

「これやってから、六年生から告白されたんだー」

「えー、いいなあ」

「はじめてどれくらい？」

「三日かな」

「すごい！ ソッコウだね！」

三日って、それってほんとにおまじないの効果こうかかな。

偶然ぐうぜんが重なっただけなんじゃないのかな。

帰りじたくをしながらクラスメイトを見ていたら、おまじないをやっていた子と目が合っちゃった。

「しいちゃんも興味きょうみある？ 教えてあげるよ」

「いや、いいよ。わたしはみんなみたいに好きな人がいないから」

「すてきな人とであえるおまじないもあるよ」

「んー、それもちょっといいかな。好きな人ができたらお願いするね」

いつもみたいのことわって、ランドセルを背負^{しょ}って教室を出る。

だけど、家に帰りたくないから、すぐには学校を出ない。

教室からは、「好きな人がいれば毎日楽しくなるのに」という声が聞こえた。

好きな人がいるだけで毎日が楽しくなるなんて、ありえないよ。

テレビの恋愛^{れんあい}ドラマも、よくわからない。あんなの、なんだか疲れ^{つか}そうだし、なや

んだり泣いたり、楽しそうには見えない。わたしはまだいいや。

図書室に向かおうとしたら、ひょろっと背^せが高い男の子とすれちがった。あまり見かけない顔だから、六年生かもしれない。

その子はそのままとわたしの教室の前を通りすぎていく。

「きゃあ！ いま王子様通ったよー！」

「やった、今日はついで^{きょう}！ 朝の占^{うらな}いで、おとめ座一位^ざだったもん！」

「ステキだよー！」

教室から、おまじないをやっていた子たちがはしゃぐ声がした。

いまの子のどこがいいんだろう？ 細くてなんだか風が吹いたらたおれそうだし、それじゃたよりにならなそう。どうせなら、男の人は、もっとたくましいほうがいいんじゃない？ 力仕事もかんたんにこなしちゃうような。

だけど、教室にのこっている子たちは「王子様」のことがとても好きみたい。

「王子様が彼氏だったらなあ」

「かっこいいし、やさしいし、いうことないよねー」

「そうそう」

「わたし、まえに荷物を持ってもらっちゃった！」

「えー、いいなあ。さっすが紳士！」

「授業で使う地球儀と地図をはこんでたんだけど、重そうにしてたら、さっとあらわれて、手伝ってくれたの」

それくらい、ふつうのことだと思っただけだな。荷物を持っただけで、大げさすぎ

るよ。どうしてそんなに有りあがるんだろう。

わたしの疑問^{ぎもん}をよそに、教室の子たちはべつの話題にうつる。

「ねえねえ、彼氏^{かれし}との相性^{あいしょう}はもう調べたの？」

「うん。だけど星占^{ほしうらな}いの本だといまいちだったの。だから、占いのお店に行って、占い師^しさんに見てもらいたいなあ」

「それなら、商店街にある『くろねこ占い』がいいと思うよ。当たるって評判^{ひょうばん}だし、子ども料金があるからふつうより安いの！」

「ほんと？　じゃあこんど行ってみる」

当たる占いなんて、ほんとうにあるのかな？

占いなんて、どれもいいかげんだと思う。占いに運勢^{うんせい}や相性を左右されるなんて、どうかしてるよ。

どうしてみんな、あんなに占いを好きになれるんだろう。

占いなんて、なくなればいいのに。そうすればぎゃくに心配ごとへって、もっとみんなが幸せになるよ。



「あの人、今日もきてるのかなあ……」

家に帰りたくないから、廊下にしばらくいたけど、いなければよかった。みんな、占いとかおまじないとか、そんなのばかり。学校でも、家でも。

うちには、週に何回か、変な姿のお婆さんがくる。

そのたびに、わたしは占いがきらいになるんだ。

お母さんは、あのお婆さんにだまされていると思う。どうして毎回にか買うのかわからない。

お母さんはなんであんなものがほしいんだろう。金ぴかのスリッパなんて、お母さんにもわたしにも似合わないよ。

しかたがないから、今日もまた図書室に行った。

そしていつものように下校時間のギリギリまで図書室にいて、司書さんに帰るよう
にいわれてから、ようやく学校を出る。

できるかぎり時間をかけて家に向かう。

あのおばさんにはあいたくないから。

まだ夜六時まえなのに、外はもううす暗い。

お母さんとふたりで住んでいるアパートの前で足を止めて、自分の家がある二階にはあがらずに、階段の下から見上げる。

お母さん、今日はやく帰ってくる日だから、たぶんあの人もきてるんだろな。

「ただいまー」

玄関の扉をあけると、やっぱり、あの人がいた。

どうやって着るのかわからない魔女みたいな黒い服を着て、銀色の長い髪をうしろに流している。あの髪はたぶんかつらだと思う。

「じゃあ今日は、この金の壺をお買い上げということでもよろしいかしら。玄関にかざると、みるみる運気がアップしますよ」

「星宮さん、いつもありがとうございます」

今日は金の壺か……。

また玄関^{げんかん}が金ぴかになる。

お母さんはどうしてこの人にお礼をいうんだろう。そんなものいらないよ。お母さんはすごうれしそうだけど。

わたしの家は、この星宮^{ほしみや}さんのせいでおかしくなっている。いつからきているのかわからないけど、たぶんもう五年くらいはうちに通っていると思う。

金ぴかのかべ紙、金ぴかの玄関マット。金ぴかのクッションに金ぴかのテーブル。玄関だけじゃなくて、家じゆう「風水^{ふうすい}」っていう占い^{うらな}のせいで、なにもかも金ぴかになっている。

お母さんがお金を払^{はら}っている横を通して、わたしは自分の部屋^{へや}に逃^にげた。家の中で、わたしの部屋だけは金ぴかのものがない。

お母さんはいつでもわたしの部屋も金ぴかにしようとするけど、わたしは風水なんて信じていないから、必死^{ていし}に抵抗^{ていこう}する。

お母さんはどうして家をおかしくするんだろう。

あんな、役に立たないものを買うお金があるなら、おいしいお菓子^{かし}とか、もっとか



わいい服とか、たくさん買えると思うんだけどな。

お母さんには星宮さんみたいな暗い服じゃなくて、きれいな色のセーターを着てほしい。わたしだってもっといろんな服を着たい。

ため息をついたら、玄関げんかんから金ぴかの壺つぼを床ゆかに置く音がした。

あの壺、かさ立てにしたら、お母さん怒るだらうなあ。